
取材

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

取材

【Nコード】

N4222K

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

俺は自称フリーライターだ。

何故自称なのかと言うと、まあ、俺の記事は売れないからだ。

それはもう悲しいくらいに売れない。

売れない。

売れないんだよあ。

俺は自称フリーライターだ。

何故自称なのかと言うと、まあ、俺の記事は売れないからだ。

それはもう悲しいくらいに売れない。

売れない。

売れないんだよお。

もうライターやめて他の仕事にしようかと思ったりもしたが、俺は夢をあきらめる事が出来なかつた。

これではいけないと俺は一念発起する。

どうしたら売れる記事をかけるのか？

そもそも売れる記事とは一体何なのか？

売れる記事、それは人の書けない記事ではないかと思った。

そして、売れる記事を書くために俺は他の人の行かない所へ取材に行くことにしたのだ。

もしこの取材が失敗したら、その時はきっぱりライターをやめようと決心を固めながら。

その国は近くて遠い国。

麻薬の密売と兵器の輸出によって外貨を得ている国である。

船があつたところに比べれば入国しにくくなっているが、そこは草の根のネットワークである。

言葉のくせを会得し、服装なども変えて、まるっきりその国の人になり準備万端。

それから、なんとかその国に住む人の助けを借りて何とか入国する事が出来た。

そして、俺の取材するその場所とは・・・

「ああ、すまない。少し話を聞かせてもらえらるだろうか？」

俺はその施設にいた恰幅の良いおばさんに話しかける。

おばさんはあからさまに嫌な顔をし、無視しようとした。

「少しでもいいんだ。時間を取れないだろうか？」

俺は袖の下を渡すと、おばさんはきよろきよろとあたりを見回し、

「少しだけだよ」

とこそりと呟いた。

「その、ここで栽培されてるあれって、あれだよね？」

と俺が言葉を濁すと、

「ああ、麻薬だね」

と悪びれた様子も無くおばさんは答える。

そう、その場所とは麻薬の工場であった。

この国の中でもあまり他の国の人間に知られたくない場所。

そして、その分危険な場所であると言えた。

「何だい、欲しいのかい？」

「い、いいや。そうじゃない」

「そうかい」

「そうじゃないが、興味はある。麻薬なんてものそんなに簡単に持ち出せるものなのか？監視が厳しいんじゃないのか？」

「ああ。厳しいね。この前も一人捕まってたような気がするよ。けど、わたしやそんな捕まるようなへまはしない。安心しな。ちゃんと金払えば流してやるよ」

「いや、だから俺はいらなんだって。まあ、いいや。持ち出し可能って言う事は自分で使った事もあるのか？」

「いや、無いよ」

「興味は？」

おばさんは首を振る。

「そりゃ、他の人間で使っている奴もいるかもしれないけど。わたしや、それを使ったらどうなるかよく分かってるからね。使いはしないよ」

その危ない薬を俺に売ろうとしてたのな。けれど、なかなかに興味深い話も聞いた。

後は使っている人間の取材もしたい。

そう思つて、次の場所へ立ち去ろうとすると

「ちよつと待ちな」

おばさんが俺の腕を掴む。

「な、何か？」

「監視が厳しいつて言つただろ？」

おばさんは親指で後ろを指すと、そこには男が二、三人構えている。俺は背筋に汗が伝うのを感じた。

「あんたに話しかけられた時からあんたの正体なんてお見通しなんだ。さあ、来てもらおうか？」

「何の事でしょう？俺には何のことやらさっぱり」

周りを見回し、逃げる先を探す。

見つかるのは俺が逃げたら追ってくるであろう人間の影だけ。

無駄かもしれないが、逃げるべきか？

「とぼけなくても良いから。今ちよつど密売人の言語教師がいなくて助かったよ。まさにナタホタだったか、カモネキだね。あんた、この国の言葉と他に何が喋れんたい？」

タナボタとカモネギです、おばさん。

「・・・英語とポルトガル語も少し」

「はっはっはっ。十分。優秀だね、あんたは。なに、悪いようにはしないさ」

おばさんは容赦なく俺の背中を叩く。

そして、おばさんに連れられて行く俺。

こうして俺は取材に失敗したが、次の就職先を探す手間は省けた。いや、まだ取材を続けているという考え方もある。

今度は潜入調査。

なかなか経験できない事ではある。

これはいい記事が書けそうな気がする。

まあ、帰れたらの話だけれど・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4222k/>

取材

2010年10月8日22時31分発行